

教育 「二十四の瞳」の残像

壺井栄原作、木下恵介監督の映画「二十四の瞳」は、高峰秀子演じる大石先生と共に、今もって私には音声を伴い形象化する。

私はこの物語を見知り、原作を何度も読み、学校の先生に憧れた。でも夢は遠く、私の成績は最劣等だったのだ。小学校では、先生につまらないことでよく殴られた。兵役帰りの先生だったのだ。家に帰ると私の母は、腫れ上がった私の顔を見て、「殴られるお前が悪い」の一言で、明快な対応であった。その先生も先年亡くなられた。私は教員になってから、年に一、二度はお伺いし思い出話と共に、教育の要諦を聞かせていただいていた。しかし、その帰りには何時も割り切れない思いが尾を引いた。それは先生が決まって優秀だった同級生の名前ばかりを挙げて話題にすることであった。でも、葬儀の日、話題になった人たちは誰一人として参列することなく、焼香に進み出たのは皮肉にも私一人だったのである。私はここで恩師の批判をしているのではない。これを他山の石とし、このことから教員として大切なことを教わったおそと思っっているからである。学ぶことは日常のどんなところにもあるのである。

ところで、悪口と言えば親御さんが家庭で先生の欠点を云っても、

子どもは喜ぶものでは決してない。「孟子」の文言にも「子ハ易ヘテ教フ」とある。子どもは他人に教えられる緊張感の中で学んでいくものなのである。先生にも個性がある。先生の長所を話題にすれば、子どもは先生の話をよく聴くようになることは間違いない。

確かに一部の教員にも問題はある。民主々義教育は是としても、「同じ目線での教育」を勘違いし、教室から教壇を捨て、男女ともに「君」と称ばせ、教師に対しての敬語の使用を禁じている教員もいる。教員と生徒は立場も役割も違うことは明らかである。教育は、基本的に他人に対して敬愛の心がなければ、仁も徳も人間愛も成立しない。それ故に、教員は客観の羅針盤を見誤ることなく、常に公平と自己修養が欠かせないのである。これは旧体を墨守するという意味ではない。これが民主々義の原点であるからである。

「自由」は尊いものであるが、弱点は人々が興味関心のあることにしか心を向けないことにある。教育は忍耐を伴う。しかし、それがどうしても教え子たちの将来に必要なら、それを行動で示し続けなければ説得力を持たない。教員にも刑事罰はあるが、徳育を怠っていない教員に罰はない。教育が最終的に目指すものは成績ではなく「人格の涵養」であると私は信じている。現場にいた頃、玄関と

私室には「誠心を育成せざるの知は無知に等しかるべし」を掲額し、

折りあるごと^{はんすう}に反芻していた。

考えようによつては文科省の揺れは最も罪が重いと言つてよい。

ゆとり教育の失策は、授業時間数の加増で補おうとしているが、週四十時間の批准に縛られ、欧米並みに土、日を連休にしてみました。

その挽回は残りの週五日に皺^{しわ}寄せされる。親さんたちの仕事は週六日制が多い。世の中の風潮は女性が働くことを勧めているように思えるが、子どもたちにとって両親が留守にする一日を有効に過ごしているとは考えにくい。むしろ、親は子どもたちが学校へ行っているほうが安心なのである。しからは教員は？となるが、教員は四六時中仕事が続まっている訳ではない。つまり、どうしても共働きを奨励し学校を五日制にするならば、教員の勤務形態を根本的に改め、日曜日を除いた六日の一日を輪番で休みとすればよい。知恵を出せば小学校でも可能であるし、中、高においても本の読み聞かせと読書、午後は部活動等々、授業だけでは得られない貴重な時間になるはずである。教員の資質には向き不向きがあり、情熱も使命感も千差万別である。退勤五分前に机上を整理し、退勤時間ぴったりに帰る教員もいれば、部活動で生徒の面倒を見てから翌日の準備をして

帰路につく教員もいる。一見、生徒から見れば皆同じように見える先生でも、生徒は日々成長し、大人になり、人を視る鑑識眼が育っている。そのときの評価は怖いほど正確で厳しいものだと思ふべきである。教員は守備範囲の広い外野の球拾いと思えばよい。そのお礼の言葉は卒業生が必ずくれるはずである。

さて、現行のままでは、真剣で良識ある教員まで度々変更される方針に拠り所を失い、使命感を喪失しかけている。親たちは学校教育を軽んじ、子どもは北斗星を見失っている。私は日本が学力で世界一になることが最も意味あることとは考えていない。知識だけでは幸せは保証されないからである。その代り、良識と優しさと正義感をいつもポケットに入れておく国民でありたいと思っている。これが本来の「人間の知性」だと信じるからに他ならない。それからもう一つ、教員は単なる労働者ではない。自らが使命感の達成という喜びを得、児童生徒に将来の夢を与えられるのは教育者だけである。従って教員は勤労者なのである。

その昔、「二十四の瞳」を觀て教師になろうと思った悪戯坊主いたずらが居た。戯れことばに、「女性むすめは化粧で化ける」という俚諺があるが、男が化けると不思議なことを言うようになるものである。